

## 2024年(令和6年)

## 1月例会

日時：1月20日(土)14時より

(オンライン方式での開催、Zoom URLは後日配信)

講師：日本女子大学 田中有美

題目：喜びの食卓へ — エドナ・ルイスの『田舎料理の味』と  
アメリカ南部文学における食表象 —

司会：フェリス女学院大学 小泉泉

## 3月例会

日時：3月16日(土)14時より

会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1  
(対面方式での開催)

講師：日本大学 芳賀理彦

ディスカッサント：神奈川大学(非常勤) Stephen Choi

(\*発表45分+ディスカッサントによるコメント(20分)+フロアとの質疑応答)

題目：日本現代文学における、知的障害・発達障害の  
「脱・語りのプロテーゼ」の可能性について

— 村田沙耶香『コンビニ人間』と宇佐見りん『推し、燃ゆ』 —

司会：昭和女子大学(名誉教授) 森本真一

INSIDE THIS ISSUE

1. 1月(オンライン開催)・3例会案内
2. 例会要旨等
3. 東京支部短信

役員連絡会開催のお知らせ

2024年1月例会終了後、オンライン方式で開催します。(役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します)

幹事会開催のお知らせ

第3回幹事会

2024年3月例会終了後、対面方式で開催します。(幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長です)

# 1月例会発表要旨

## 喜びの食卓へ

——エドナ・ルイスの『田舎料理の味』とアメリカ南部文学における食表象——

日本女子大学 田中有美

エドナ・ルイス (Edna Lewis, 1916-2006) は、アメリカ南部の食文化の価値を最初に理解した料理人の一人である。ルイスの自伝的料理本『田舎料理の味』(The Taste of Country Cooking, 1976) は、南北戦争終結後に解放されたルイスの祖父が立ち上げた小さなコミュニティの豊かな食文化の貴重な記録でもある。本発表では、料理人として「南部性」に向き合ったルイスの文学に対する理解を手がかりにして、南部文学における食空間の役割について考察する。

ルイスは料理本に加えて、「南部的とは何か」という短いエッセイを執筆しており、「南部的」な文学作品のひとつとして、具体的にリチャード・ライト (Richard Wright, 1908-1960) の短編「輝く明けの明星」(“Bright and Morning Star,” 1938) を挙げているが、この選択は注目に値する。なぜなら、『田舎料理の味』では、素朴ながらも、ヴァージニアの季節の移り変わりに合わせた、穏やかで満ち足りた食風景が描かれているのに対し、ライトの短編では、台所という空間や食事が、人種間の軋轢を暴力的に露呈させるものとして機能しているからだ。ルイスがライトに見出した「南部性」、そして、ルイスが、自らの料理を、アフリカ系の食文化に対してよく使用される「ソウル・フード」という言葉で説明することを固く拒否していたことにも留意しつつ、本発表では、フレデリック・ダグラスやハリエット・ジェイコブズの奴隷体験記や、料理本を含めたアフリカ系の南部文学における食の表象を概観し、非アフリカ系の南部作家たちの食の描写とも比較しつつ、南部文学、とりわけアフリカ系の作家たちの手によるテキストにおいては、食の空間が、人種間の闘争や抑圧、そして、権力への抵抗が生起する生々しい現場として機能するという一種の伝統があり、ルイスの『田舎料理の味』が、そういった伝統に対する批評となっている可能性を示したい。

# 3月例会発表要旨

## 日本現代文学における、知的障害・発達障害の「脱・語りのプロテーゼ」の可能性について ——村田沙耶香『コンビニ人間』と宇佐見りん『推し、燃ゆ』——

日本大学 芳賀理彦

日本の近現代文学における知的障害の表象の変遷は、河内重雄『日本近・現代文学における知的障害者表象』(2012)によって次のようにまとめられている。20世紀初頭においては、知的障害者は理性と意志を欠いた「非人間」として描かれていた。それが徐々に、知的障害者も意志を持つ「人間」として描かれるようになり、その過程で、知的障害者と健常者の二項対立や、「知的障害者(周縁)／健常者(中心)」という構図も解消されてきた。青来有一の「石」(2005)という作品では、知的障害者自身を主体(一人称の語り手)とする手法が、その中心と周縁関係の転覆のために有効に使用された。

また、Alice HallのLiterature and Disability(2016)によると、アメリカにおいては、すでに1929年に、ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』第一章で、知的障害者のベンジーによる一人称の語りという手法が取られており、フォークナー自身は「壮大な失敗」とみなすものの、文学的表現の可能性を示唆し、知的障害を単純に欠陥として描くことを拒否した点で、文学のみならず文化全体に大きな影響をもたらした。そして、1980年代以降、知的障害・発達障害者主体の物語だけでなく、自伝も多く書かれるようになり、ベストセラーも生まれる。教育の場でも参照され、理論書よりも有効であるとみなされるものもある。

さらに、Alice Hallの同書においては、「知的障害」を示す名称の時代による揺らぎや分類分けの困難さにおいても論じられており、「障害」の名称や区分の仕方は文化への依存度が高いという点も指摘されている。議論を進める上で、知的障害や発達障害(自閉症を含む)の明確な区分けや定義を避け、暫定的に「cognitive impairment」という用語が用いられている。また、David T. Mitchell and Sharon L. SnyderのNarrative Prosthesis: Disability and the Dependencies of Discourse(2001)で提示された、「語りのプロテーゼ(narrative prosthesis)」という批判的概念を紹介し、これまで多くの文学作品において、知的障害に限らず「障害」が物語を補うための「プロテーゼ(補綴)」、つまり道具として、テンプレート的に消費されてきたのだと述べる。

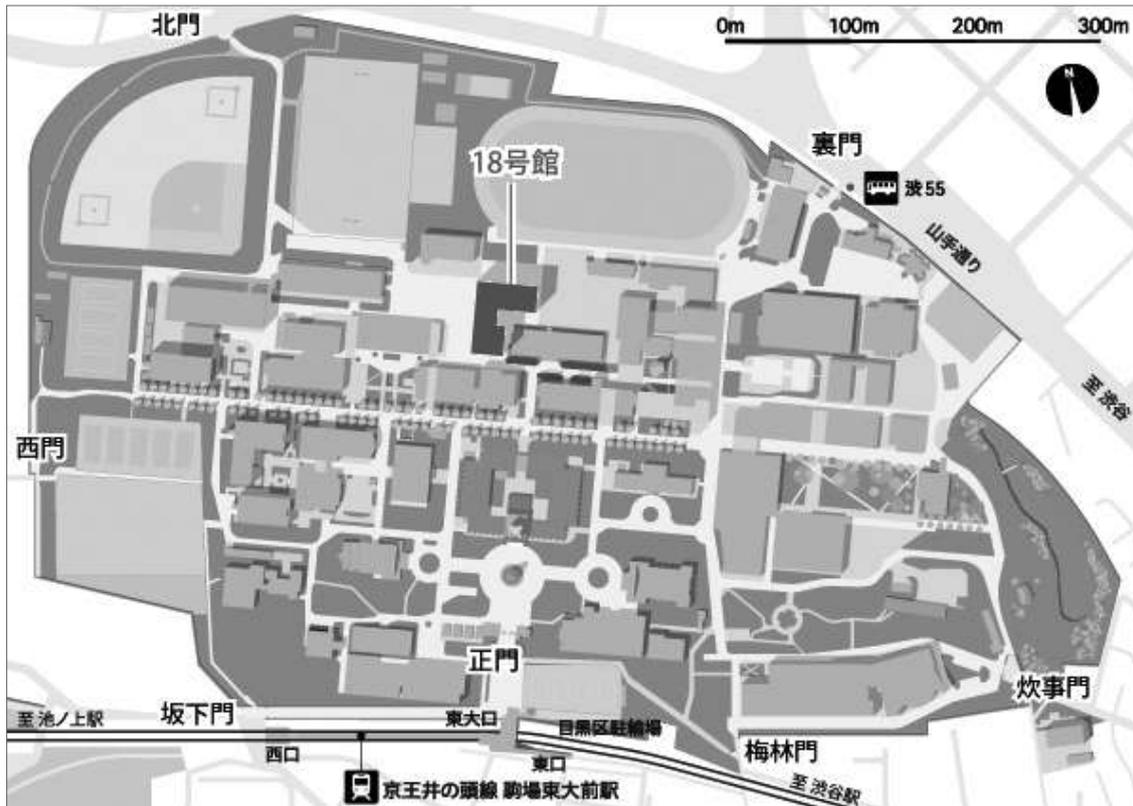
以上のような先行研究を踏まえ、本発表では、村田沙耶香(1979-)の『コンビニ人間』(2016)と宇佐見りん(1999-)の『推し、燃ゆ』(2020)を、日本現代文学における知的障害・発達障害の表現形式の一例として取り上げたい。テキスト内で明確に述べられているわけではないが、この二作品の主人公(語り手)の言動からは発達障害(自閉症)的兆候がうかがえ、多くの読者にもそのように受容されている。どちらも芥川賞受賞作品であり、出版部数も多く、また海外でも多数の言語で翻訳出版されるほど知名度の高い作品である。そのような作品内で、知的障害・発達障害がどのように「語りのプロテーゼ」を脱して表現されているのか、その可能性について検討したい。

# 3 月例会会場

東京大学 駒場 I キャンパス 18 号館 4 階 コラボレーションルーム 1

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

◆京王井の頭線「駒場東大前」駅下車



# 東京支部短信

## <訃報> 中野記偉（上智大学名誉教授）

2023年3月14日上智大学名誉教授の中野記偉先生が逝去されました。享年95。中野先生は英文学と比較文学、キリスト教文学を研究され『逆説と影響—文学のいとなみ—』を刊行なさいました。訳書には『イグナチオとイエズス会』があります。また支部幹事などを歴任して支部活動に貢献されました。謹んで御冥福をお祈りいたします。

## <訃報> 源 貴志（早稲田大学教授）

早稲田大学教授の源貴志先生が2023年12月15日に逝去されました。享年61。源先生のご専門分野は二葉亭四迷や昇曙夢研究など日露比較文学研究でした。支部幹事、支部事務局長などを歴任し、オンラインによる2021年度全国大会開催の実現にもご尽力されました。今年度、東京支部長に就任、支部活動を始動された矢先のことでした。心よりご冥福をお祈りいたします。

## 支部長の急逝と学会支部運営について

訃報にもありますように、東京支部長の源貴志先生が急逝されました。研究者としても学会支部事務局長としてもご活躍されていた存在であっただけに、まことに残念であり、その行き届いた配慮と温かい人柄が偲ばれます。このような前例はなかったため、学会支部規約8条に則り、しばらくの間は支部事務局長が「必要に応じて支部長の任務を代行する」こととなります。早急に幹事会を開催し、また元役員の方のご意見も伺いながら、学会運営に支障がないよう努めたいと思います。今後の対応は随時メールマガジン、『ニューズレター』でお知らせいたしますので、ご理解いただければ幸いです。

## 1月、3月の例会について

2024年1月の例会は、海外（米国）からのオンライン発表となります。アクセス先は例会の1週間前にホームページおよび支部会員向け一斉メールでお知らせいたします。3月の例会は、新しい試みとして、通常の研究発表後、ディスカッサントにコメントをお願いし議論を深め、その後の質疑応答につなげる予定です。

## 月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局(hikaku.tokyo@gmail.com)に氏名、所属、題目、連絡先(メールアドレス、電話)を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分(質疑応答を除く)です。

## 東京支部事務局より「お知らせ」の配信について

東京支部では支部会員のみなさまにメールマガジンの「お知らせ」をお届けしています。原則として毎月1日発行で、例会や支部大会などの情報を掲載しています。これまでお手元に届いていない方は、日本比較文学会東京支部の支部会員のページの「お知らせ」のウェブサイト(<https://www.hikakutokyo.com/mm>)のフォームにご記入のうえ「配信希望」をクリックして下さい。メールアドレス変更の場合も、お手数ですが、新アドレスで再登録をお願いします。

### 日本比較文学会東京支部ニューズレター 142号

発行人：事務局長

編集委員会（編集担当）

委員長：椎名 正博

委員：岩下 弘史 亀井 伸治 越野 剛 庄子 ひとみ 鈴木 美穂  
中垣 恒太郎

事務局 事務局長：宗形 賢二

事務局委員：川野 礼音 小泉 泉 土田 久美子 芳賀 理彦  
畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒411-8588

静岡県三島市文教町 1-9-18

日本大学国際関係学部

三島駅北口校舎 607研究室(宗形賢二)

TEL：055-980-1924

E-mail: hikaku.tokyo@gmail.com